



小説・演劇

赤江 瀑

あか え

ばく

下関市

(1933～2012)



下関市立近代先人顕彰館（田中絹代ぶんか館）

【著作】

『ニジンスキーの手』（昭和49・角川文庫）
『オイディプスの刃』（昭和49・角川書店）
『戯場国の森の眺め』（平成9・文藝春秋）

ほか

下関市立近代先人顕彰館（田中絹代ぶんか館）では、小説のほか、演劇関連著作の閲覧もできる。

虚と実のはざまに結界する赤江美学

鮮烈な文学デビューだった。一九七〇年初頭、小説現代新人賞受賞作『ニジンスキーの手』は、五木寛之、野坂昭如らに激賞され、以後次々と『罪喰い』『獣林寺妖変』など発表。『八雲が殺した』『海峡―この水の無明の真秀ろば』で第十二回泉鏡花文学賞、『オイディプスの刃』（長篇・映画化）で第一回角川文学賞を受賞。華やかで独特の美学ワールドは、横尾忠則や唐十郎らを魅了した。

下関市生まれ、戦時中の強制疎開で菊川町に移住、戦後、旧制豊浦中学校入学、一年後、新制県立豊浦東高校（現田部高校）に編入、のち日本大学芸術学部入学。学生時代は詩誌『詩世紀』などで活躍、注目されていた。帰郷後、菊川町に在住、本名の長谷川敬（たかし）でラジオ・テレビの放送作家として西日本地域で著名だった。明治百年記念脚本募集に応募した『大内殿闇路』が受賞こそ逸したが、最終候補に残った。たぶんこのチャレンジを奇貨として、脚本から小説に舵を切った。美学の旗手、赤江瀑の誕生だった。

長編をふくめて二百五十編以上の作品を華麗に文学界に刻みつけた赤江瀑には、京都を舞台にした作品が印象的で、山口県との由縁が見落とされがちだが、赤江瀑ほど山口県、つまり産土^{うぶすな}の地霊や景勝地を小説世界に映し出した作家は少ないのではないか。父祖の地が萩でもあり、このことが色濃く反映しないはずは無い。筆者は東京・立風書房の出版企画、赤江瀑の山陰山陽小説集『飛花』の巻末エッセーを書くため取材したが、『ホルンフェルスの断崖』『鬼恋童』『原生花の森のつみぎ』『闇絵黒髪』『サーカス花鎮』など、ふるさとの書割満載である。しかも、行きずりの旅人が刻みつけたものとは異質の味わいがあり、コクが深い。『花帰りマックラ村』は、宇部奥の万倉の地を望郷する物語だが、吹く風の匂い、土塊の感触、樹林のざわめきなど、県内各所を妖艶な舞台に昇華させている。

（文・武部忠夫）



「泉鏡花文学賞」受賞時（左）（右は古川薫氏）



揮毫石碑（田部高校・玄関植込み）

死亡記事はごく短いものであった。

庭に青葉の陽かげがゆらぐすこし汗ばむくらいに暖かな休日日の午前どき、遅い朝食をすませたあと、ふだんそんなに物ぐさではないわたしの部屋も、独り身の気安さと勤めを持つ身の慣わしで、日曜日ともなると、けっこうこまごました片づけものや、掃除や洗濯仕事などが身のまわりには溜^{ため}っていて、人並みに女らしくそんな雑事に手をとられ、いつも一段落するともう正午近くになっているのが常だった。

その日もそうで、きちんと片づきあがった部屋に初夏の明るい光りや風をいっぱいに入れながら、さて一服といった気分で、古新聞を陽のあたる廊下へひろげて、指の爪を剪^きっていた。

硝子戸を開け放ったこの南向きの二階部屋の廊下には、庭の青桐の梢が近々と葉むらを寄せていて、あふれたつ陽ざしをみどり色に染めあわあわともえひろげるこの時季が、いちばん心がくつろぐのだった。わたしは、足の爪を剪^きっていて、手もとに眼を落していたせいで、その記事に気づいた。ちやうど土踏ま^{つみぎ}ずのあたりの紙面に、それは載っていた。

「えっ？」

のばした足をあわてて引き、爪屑をわきへ搔き寄せて、すこしわたしはうろたえていた。

地方紙の最下段に一段組みで、

『昔話の伝承者死ぬ』

という小さな見出しが掲げてあるだけの、ほんの短い報道記事だった。

（『原生花の森の司』より）

赤江瀑

年譜

昭和8（一九三三）年	七歳
昭和15（一九四〇）年	一歳
昭和19（一九四四）年	一歳
昭和21（一九四六）年	一歳
昭和27（一九五二）年	一歳
昭和30（一九五五）年	二歳
昭和33（一九五八）年	二歳
昭和45（一九七〇）年	三七歳
昭和46（一九七二年）	三八歳
昭和47（一九七三年）	三九歳
昭和48（一九七三年）	四〇歳
昭和49（一九七四年）	四一歳
昭和50（一九七五年）	四二歳
昭和52（一九七七年）	四四歳
昭和53（一九七八）年	四五歳
昭和54（一九七九年）	四六歳
昭和56（一九八二年）	四八歳
昭和59（一九八四年）	五歳
昭和63（一九八八年）	五五歳
平成元（一九八九年）	五六歳
平成4（一九九二年）	五九歳
平成8（一九九六年）	六三歳
平成12（二〇〇〇）年	六七歳
平成13（二〇〇二年）	六八歳
平成19（二〇〇七年）	七四歳
平成24（二〇一二年）	七九歳

（提供・武部忠夫）

4月22日、下関市宮田町に生まれる。父初五郎、母芳子の次男。

4月、下関市立名池小学校に入学。（翌年より国民学校）

空襲激烈となり強制疎開のため、一家は豊浦郡豊東村（現下関市菊川町）に移住。

4月、山口県立豊浦中学校に入学。

春、日本大学芸術学部演劇科に入学。

詩作、映画研究、学内舞台演出に活躍、大学を中退。

放送作家の道に入る。NHK、民放など中央、地方おりまぜて、ラジオ、テレビドラマ、録音構成、ドキュメンタリーなどを手がける。

『ニジンスキーの手』が第15回「小説現代新人賞」を受賞。『小説現代』12月号に発表され、鮮烈なデビューを果たす。

『獣林寺妖変』（『小説現代』2月号）、「サーカス花鎮」（『別冊小説現代』新秋号）発表。11月6日、山口県芸術文化振興奨励賞受賞。

『ホルンフェルスの断崖』（『別冊小説現代』初夏号）、「鬼恋童」（『小説現代』9月号）発表。

『罪喰い』が「第69回直木賞候補」となる。

『オイディプスの刃』（『野生時代』7月号）で第一回角川小説賞受賞。

『金環食の影飾り』（『野生時代』5月特大号）が「第73回直木賞候補」となる。

『原生花の森の司』（『小説現代』6月号）発表。

『七夜の火』（『問題小説』3月号）、「花帰りマックラ村」（『別冊小説新潮』冬季号）発表ほか。

『海贄考』（『問題小説』7月号）、「八月の蟹」（『小説新潮』10月号）発表ほか。

『鬼会』（『小説新潮』4月号）発表、「花曝れ首」（『講談社文庫』刊行）、「あやかしの鼓」（原作・夢野久作）脚色上演ほか。

『海峡―この水の無明の真秀ろば』・「八雲が殺した」で「第12回泉鏡花文学賞」を受賞。

『忍夜恋曲者』（『すばる』10月号）発表ほか。

『エッセイ鈔』オルフェの水鏡（『文藝春秋』刊）、「雛の夜あらし」（『問題小説』4月号）発表ほか。

京都小説集 其の壱『風幻』其の貳『夢跡』（立風書房）刊行。

エッセー『戯場国の森の眺め』（『西日本新聞』に連載、のち『文藝春秋』より）刊行。長篇『星踊る綺羅の鳴く川』（『小説現代』平成9年9月増刊号／平成12年2月・講談社）刊行。雑誌『幻想文学』第57号で特集「伝奇燦爛―赤江瀑の世界」ほか。

10月、国立劇場の第20回特別公演のために書き下ろした浄瑠璃作品「殺蟬火怨寝刃」が上演される。

『赤江瀑の「平成」歌舞伎入門』（学研新書）刊行。

下関市長府宮崎町の自宅にて急逝。

（昭和52（一九七七）年 講談社文庫『罪喰い』「年譜」を参考に作成）

赤江 瀑